六樹園
飯盛著

近江縣物語

巻ノ三

へ 13
2893
3

近江縣物語巻之三

○ひえぎのうひ山ふく

橘乃安世ハ近江の國にありて世をやすくいとなミけり。おりそびぬすびと共數百騎にておそひ來れどひとさ川のがれあらんとハあらじとて妻が手をとりて路もなき所をふミわけたどりまよひ出るにそちでもむすめ薗生ハいまだ成しなびひとのさまにもへられしに一定せり。なにとなれあるらし花乃すがたもむくつけき山風のかどひてつれゆきけるをとおもひをひさまよ足もすゝまゞ雨波なりねどもわれもつりあまほどしるべしと雨まかくまよひなるべきすゝみところ見やくむせびゆくへものどかにちぎりあらんとて。

門 へ 13 號 2893 巻 3
昭和九 七月三日 購求

あるべかりしが、伊賀の國よりこえきたるかしこに、安世がめのとが弟なりけるものゝ農夫なりしが家をまもりてすむ翁ありけれバ、尋ねゆきてあるくしかたらひけるに、たのもしくうけひきて、ひろげかひしをつくりてかくしつかひけるなぞや、むかしのよしみありて、あらゝハうきをもすぐしけるに、これハさておきて、安世が甥なる常人ハ、かの逃ぬれびとのせめきたるさわぎに、おそれまどひて、かのわたりをさまよひ逃出て、かくて近き大野までさまよひ行けるが、たくはへたる物もなく、ひもじくいづくへゆかんかたもなく、びんなりいかゞせんと、たゞくしと思ひめぐらしけるが、とかく盗人どものなかまに入りて、國をまちあらしば家をたのみいとふことをせん方なし。今降を乞ふかれが手下となりて、そのちしせりてんもやすかれ

べしと思ひ定めて、ぬれびとどものたむろする前に行きぬ。いかで御軍勢の内にくはへられ、いかなる奉公なりともつかまつりてんといへば、盗人どもいぶかしく申しけれバ、親さねとよめてゆるんとて引つれて、幕ひきまはしたる陣のうちへともなひ入る。あるじなるぬすびとの大将ハ調伏丸とて、いかれも名高き股肱とたのめる賊なり。常人を見やりて、汝がいふハ我軍中に定めたる例あり。それ降参のものハうるべき財をぬすみとりて、かつ甚しき頭をきりもちてくべし。おきて有り。いそぎ此方の物をとりてこバ我軍中におきて、一卒の数にくはふべしといひけれバ、追出しぬ。常人案にたがひて、あしもとにうけしゝて、たちかへるより

臆（おめ）る男なれバ此（この）よしをきくよりいろもなくなりてがたがたと
ふるひておびえしが。とかくしてそのよな思ひなやみて
かしこの松原（まつばら）に往（ゆき）てうちゆく人（ひと）をまちうけてまづ声（こゑ）を
たかくかけなしておのれこそはありつるぬす人なりといひかけなば
おそれて持（もち）たる物（もの）をも捨（すて）て迯（にげ）ていぬるものぞそれを拾ひ
うちまかせて頭（かしら）より帰（かへ）らんとやすくかへりなんとぞふさうば
しおほせて後（のち）陣（じん）屋（や）に入りひそみなんとてそとに出てぞくだりける
ける松原（まつばら）に行（ゆき）て松（まつ）が根（ね）にあしうちかけて此盗人（このぬすびと）のおとづれたち
まちける時（とき）なりしに。しばらくありて人（ひと）のけはひして見えければ
もなく近づけバいよいよかの人もわたりかゝる旅人（たびびと）がおとなかし
と見るひかりよりて見るにおほきなる火（ひ）のかげ見ゆ。ちは

人こそあれ。おのれいかでと刀に手（て）をかけつれど。そゞろに五体（ごたい）
わなゝきて。ひやゝかなる足（あし）ぶみもとまらねど念（ねん）じてたゝ
ずみゐるに。よくは見えねど松（まつ）よりもし旅人（たびびと）のせい高（たか）く
たくましきが。刀（かたな）さして裾（すそ）をつまどりにかゝげてのどのどとあゆみ
くるは。たゞものつねの人（ひと）とも見えず。あくまでしげなるけしき
その さまに。こゝろなすべきやうもなければ。ひたぎくはおそれ
すれども声（こゑ）をだにもえたてず。よどむによそなれどもぞつる
声（こゑ）出（いで）ければ。いとしくしえられげなる声（こゑ）にて。やおれ盗人
大将軍（たいしやうぐん）こゝにあり。いのちをしくば我（わが）かたに置（おい）ていねとこそいひ
けれ。かの男（をとこ）ちかづき来（き）て何事（なにごと）いふぞと声（こゑ）ひきくして
我身（わがみ）へいかでそ。其旅人（たびびと）にておはす。いや。何（なに）とぞくやし

近江縣物語巻三

いひてちからいれしバ。いよ〳〵おそろしくて。言もいでずなりたるを。とゞせて
聲をあげて。おれは引逅なりといふ〳〵ふるひてゐると。旅人
見ゝてなんといふ。ひきさきありとかけもおるべし。なにとてさいはふ
ぞといへバ。おのれをころさんとて。あまりに武者ぶるひしてさけき人
のする事ぞといへバ。旅人ほゝと笑て。おのれは引逅のいひ
山ざかなんどろうてくれんずとて。刀ひきぬきてふりあげる
ほどに。膽心もうせて。のけざまに倒れかゝり。やう〳〵起あがるに
ひよろ〳〵として。つゐに拜しゆきて。懐中物よりいだして
腰をいたみ。むやくなりとて引かへして。身のまづしさの
ぜんかるかさに。ねすゝめるやとひていかで〳〵いふ聲も
そのねぶたくあきれてはたいかの事なり。今よりむかしの

わざをやめて。入道して命つなぎて。なれ〳〵て常人にもどり
かはつゞく。力ありて。ひとおしきりけれバ。おのれよくしれるぞ。
猫同類のものなりぞといへるところに。息きれ〳〵いふて。まゝくも
あらねバ。手をとりて見すれバ。さて八同類のものにはなしとや。
けるにても。おのれさぞうらめしからん。ぬひをもて世をつる
らんと思ひさだむるにぞ。おそろしくいひけれバ。刀を鞘におさめ
てうちさらひすく。松とりてかくしこをさして。ぞ行る常人の
うしろを見送りてだゞんとせしども腰さへなり立て松の
樹にすがりて。やう〳〵立ちあがりて。かの引逅がいひし包み胸にあり
て。思ひけるハ。人の頭をとりてころしけれども。いかでさる
物の手にかゝるべきものゝ。はしらずにこの人どものゝけかれへてし

所にハうちすてし頭の二三ハ落ちりてやありけん。それもあらひ
取て欺くべしとて、所々わかれて見まハれバ、人の死
骸などあまたあり。雲透にすかし見るに、頭どもうちちら
ひてあるも見ゆ。あれこそと思ひて、其首を包みもちて、
もときたりけて調伏丸が陣へとかへり行けるに、頃ハはや明がた
ありて、東の空しらくなりて、烏などもなきつれて飛
わたる。常人陣のうちに入ぬれバ、ぬす人ども見て、親がらそ
く起出て来りといふ。そのまゝに迎ひてゐるほどに、ゆきかへる
男の鎧をきてむかひ、奥より出きたるを、何ぞととへバ、かれハ
そのころの降参せし者が、ゆゑありて高名して得たるに
頭をへて持きたれバ、ひきて物に鎧ありけるといふにて、ハ

ありしぬけれども鎧一領のぬしに成て、ありしかやと思ひて
ゐるに、今まゐりこそきたりといふ。翁すなはち入て見れバ調伏
丸鎧草のうへにねまりゐて、いかに得ものハありつるかと
とふ。さんぬく仰せを承りて、かしこの松原へゆきて、ゆひしよ
うしなり。計とおぼゆる者は、ひとつまにたち巻する
もの四人、いかりしげに松かげにとまりて、ゆきて翁をうけてゆくべし。
彼等立ちとまりて、弓矢つがひて、まつ先にする男の、あらやかに
よばりけるハ、われらをたれと思ふ。清和天皇の御子まご
六孫王経基の君より三代にあたりて、日本無双の名将とよばれ
摂津守源の頼光朝臣のうちに四天王とよばれつる渡辺
の源二綱といふを、傍にする盗人うちよして、源二綱ハ内裏の

守護として夜行警衛ハいよいよきびしけれバ此あたりへ来べきに
あらびといへど常人物をさへゆるして外の務へもやハある。
その綱が叔母の家にありて、常つ水くし飯しく一騎當
手の中間男に茨木幸人といふ者あり。征矢ひとすぢまいらせ
せんとよびぞみ夜るにハおもうし見てゆきねどたしかに重藤の
弓に雪ふの矢つがひあると覚へ、たちてきりくとひきしぼり
ぼりひやうつと射る矢を、某刀にて打おとし、其武者
まむかひて、各のまなざし太刀のきれおちかけてまよしずん
うたにかざし、打てかゝる。敵もぬきつれきりむすびるがかげろふ
いなづまの月かげにわたれかしこにはしる飛鳥のごとく、
かけめぐりて、たゞさく働きゆへど、かなはじとや思ひけん、いちあし

出して逃ゆくを、あさなくハ幸人どの返しあはせて、勝
負あれといふとめにつきて、追かけつめバ、さすがに恥をやおもひ
けん、とつて返して打てかゝるを、やり過して手どりにせんと所
みやおもひけん、ふりむく所をのつかり首をきり切てげれども
三人のやつばらをうちとりしゆゑ、くちをしくこそ思ひ候へとも
あとしきやうにうちかゝりて、これハ春日ひとみ申てゆくよく二の
包調伏丸がまへにはしり出せバ、調伏丸かしらを包さむすび
め引よせ、打ふてふるくといひてやかれ、とのども、こやつが
くりて、精器よつかけしといへど、だうしくとりきて、に経て
あるとて、常人をとりかげつどハいかさまべき、当家をは
あつてで、かうしかくいふのつぎといへど、調伏丸うちゑみける。

無慙のしれものかなこれ渡邊が士卒の頭なりやといひて。
足かけて常人がまへに蹴やるをよく見れば。女の頭なりければ
も。夜目には見えざりしにておかぬ頭をとりてきたれるなり
かの人だきゝもいれずたゞうちすてゝ面あかくなして口ごもりければ。
調伏丸かさねておのれがうでひきこそ物すくなくて候まで。
包ひき明てなげ出しけるを。ともしてみれば頭なき人の軀也。
見るより膽つぶれて例のわなゝきふるひ出し。金剛二郎
きゝてわらへば。むかふより出る人あり。見てあれば。まぎれもなき
旅人なり。金剛二郎うちえみつゝいふは。おのれを忘れ
たるか。あれはおのれがくれてやる物ぞとてなげ出しけるは。その
時きゝ我しらずなり。常人魂をうせて。生たるものゝち

せず。おのれが剛臆をためさんとて。かくつまへ入れしが。さぞあり
臆病づきたるやつとはおもへど。かくまでとは思はざりし。一度まよひ
調伏丸いひけるは。さやつらめがおのれをひしがずば。隨と見く
きたりならぬわざしのおそれなければ。とぶらひて。板風呂
乃水などしるさまべし。但馬方へ入るものなれば。例のごとく
なるべきといひて。おのおの入ぬ。盗人ども。常人が腕を渡
りて針のさきなどにて。懐しき文字をえりつけすこしも
行てひきいぞ。湯屋のまへにすゑおきたるは。いかに
ひとりの志をはつきしあれば。それ行て人のまじはりしまし
べきにあらずと思ひて。其より日ごろの心なをし渡て
ゐのさましきわざもなかりけるとぞ。

○いもがしら

それより常人ハ、ぬすびとが陣にまいりて、湯をたぎらせ日をすごしぬるうちに、金剛二郎といふ者、いかなる事にか常人がかたハらにやがりて、おのが一騎あまたぬすびとに出るやうくハ必供に具してありけり。金剛ある時ハ、此あたりの民どもの財ハ、おほかたのこりなくとりつくしつ。今よりいづくへ行て盗せましといへば、常人いひけるハ、我叔父なる橘安世といふ者、伊賀の國なるものとの岑に落ゆきしと聞り。かれもとより家富る者にて、ひろくれどすれたりければ、今またくだりもちてゆかん。又かのものとが家もゆたかなるよし、かねて聞及びていかしとくへゆかせまらん。

おのれも其所をよく存ぜざれど、かしこに至りてひろほど尋ねありきなば、しりえざる事ハあらじといへば、とのへで金剛ゆきてそれしかるべし。いざかしこへおちゆくべしとて、例のだとく常人を具して出行けり。其夜更過る比、ある一村に至りけるに、大きなる門たちて、かこひにハ竹の藪垣をめぐらせる家あり。金剛云けるハ、財ありげなる家なり。入て見んとて見まハしたれバ、前に一丈ばかりの堀ありて、橋引てあれバ、渡るべきやうもなし。金剛ふところより釣のやうなる物にながく綱つきたるをとり出し、かの竹のうへに投かけれバ、竹のうらに釣かかりつきぬ。金剛もちたる綱をひきよすれバ、竹ハうつぶしにたふれかかりぬ。

金剛二郎常八をつれて伊賀の国ある百姓の家に志のびいる所

竹のさきを手にひかへて。はしりよりつきて入れんとしけるが。常人はよけるに。竹のさきよりつきそれしバ。金剛さハ手をはなつやいなや大なる竹にてありければ。ゆさゆさとしなひ返て儀におのれが勢に起かへりぬ。常人はのがれて。藪垣の中へおちいりど落入りぬ。金剛又綱をかけて。竹のさきを引よせこなたへすがりて。門の内へ入ぬ。さて竹藪の中に入て見るに。常人ハなかなかむくと成てうちたふれ。息をもせずそつと小吹うけおどして引出しけれバ。やうやう人ごゝちつきぬ。我はしらずして来れ。ゆめ聲たてそとて。はきに立て母屋とおぼしき所まゐりて。何事するにかとぞしけり。物すれども。かゝる所とおもひしやもらうにゆきぬ。おのれハこゝに待てをれとて。常人をバすのこに置

てたゞ一人奥をさして入ぬ。しばし有て大きなる皮籠を持出て。常人がかたはらに置て。又奥へ入て此たびハ酒肴なんど持来りて。すのこの上に丈六をかきて。常人にものくはせさて草鞋をば常人にはかせて。堀にハ梯をかけ置つれバ。こゝろやすしとて又先に立てゆきて。門おしひらかんとするに鎖さしてあり。金剛おしかゝる。鉄杖とりてうちたゝく。此音にめざめして門の内へなる家の翁おき出て。窓より覗ければ。あやしきもの。皮籠さげて出るなり。盗人ならんとおもひて拍子木とりてうちさわげバ。奥のかたにても。おなじくあはせて。拍子木うちさはぎけり。金剛門の戸おしあけて。常人にひつたく逃さりて島のとぶやうにかけ出てゆきぬ。常人ハおどろき草

竹籠ハ負つ。不案内でハあり。板橋かけたる所ハいづくなるかと
すかし見れど。如法闇夜の事なりけれバ。あやめもわかれざれバ
せかれて足も定まらず。ちぐくとして。堀の中へずぶりとおち
入ぬ。家の内にハ数十人の若とのども走り出て松かきふりて
のゝしりけるが。そこらりきて。ぬすびとハ堀に落たり。引出せとく
こゑでなどしててんでに持きたりて。各声を出して引あげつ。や
がてひきくゝりて。そのほとりに立る柳の樹にしばりつけつ。ざハ一定
ころされぬべし。いまもせんかたなきぬすびとにこそしてうきめをみれ
事にと後悔して。おめくとありてゐたるに。わすれしおぼしき
翁いできて。ほくぐ見て。あやしのぬすびとにハおはさぬやうなり。
かゝることをよりきへせしハ。などかちておもひやれといへバ。若男のども

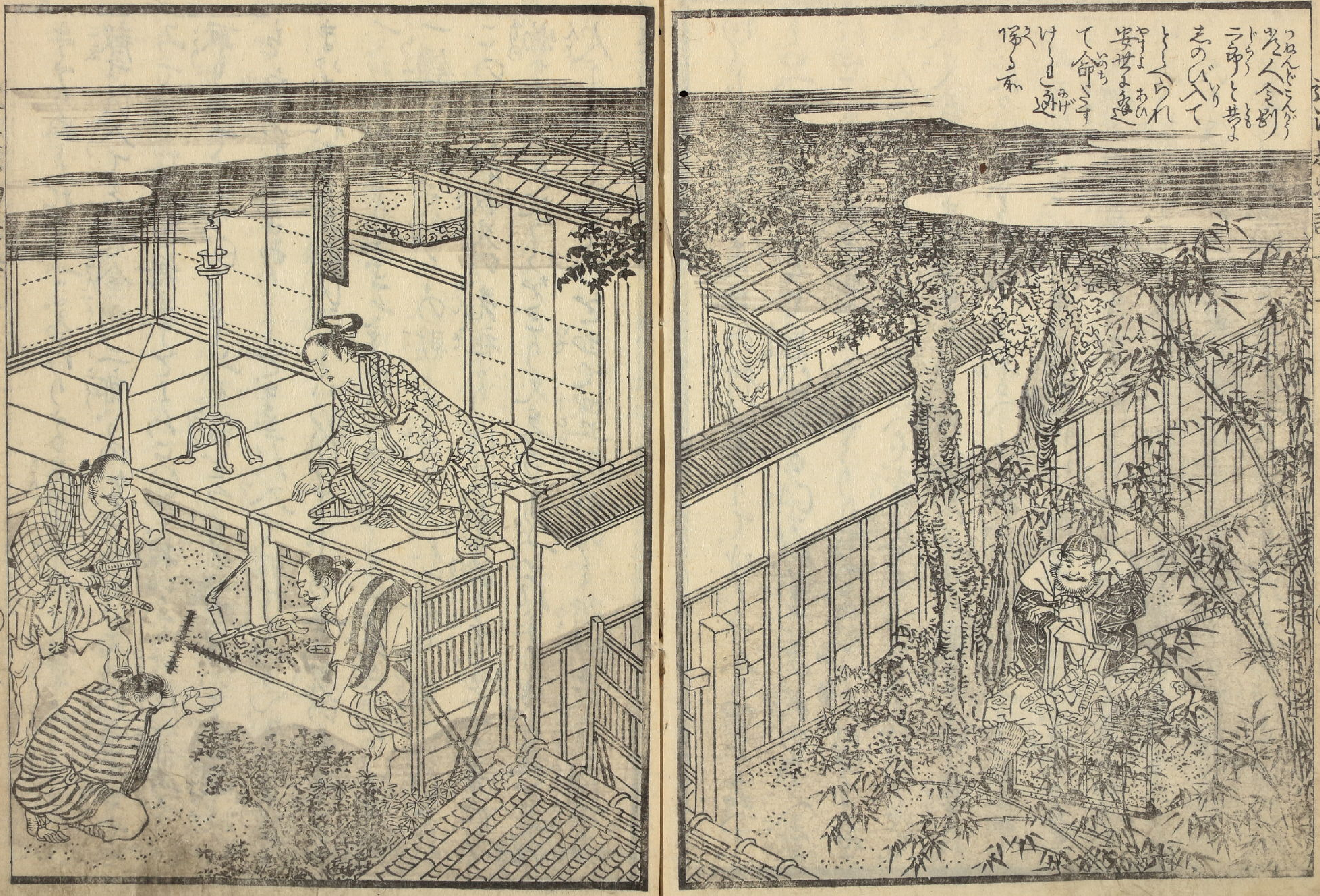
いかでぬすびとをとらへてたゞすべき道理ぞあらん。夜あけなば
おしづけしなずして底なる川にしづめてんなどいふに。いよく
心よわりて頭をうなだれてありしに。番せるものどもいたくやすみて
はやきて膝をもちながらねぶりてをれば。いたくさになりぬれ
の聲もきてのどかにおゆるみる人あり。男どもゝ頭をもたげぞ
をれば。老人ありひるハいまだ此所の長なるが。やゝ我を殺し
たりきたるなるべし。とりなしとつゞひてゐるに。此人まぢかく
来りて。紙燭とりてつくづくとうち守り見るを。聞もあへず。
うつむきゐたるに。此人声をあげて。おのれハ常人にてハあらじかね
うしろに結びて見ゆげなれど。叔父なりける橋の安世なり。
あぶなかりつうちわびて。声あげてたすけたまへくといふ。安世ふかく

されはしきりに問ければ、おのれかゝる業をなしきたれて、盗賊なり
ころさるべしとしばしありて、おのれが思ひさりした。
我またこそ違ハざりけりといへども、叔父の翁走りきてさて
え甥のとのかくおそしけるや、あらはれぬ事とて無礼
そいふしゆとていそぎ縄をかけせて泥にまみれし衣きせて
はせなどするを安世制してさる志のひそかなれバ、いかなれつき
不當のやつなりけれバ、おくべき者にあらずいはんにおのれ思ひあり
さりやとて問ひけれど安世が妻もきくありてまづひきて引かす
ら安世をかばひてよりそひて入ぬ。おなじの翁常人をいたはり
なすひさ庇につれゆき、飯などくはせ湯ひかせなどして、なぐさ
あれかし。安世かさねて常人をゆるすとてゆくにはおのれいけ

おくべきならねど、人々のなぐさめしいさめ物しければ、我いかり
をのどめて、なほ勘當してかひなきうちやすく今よりの心をあげ
あらため行ひをおもくせよ。人なかに出んにハ、さすが對面する期もあるべし
けれバ叔姪のちなみもかうぞなりし。思へといひすて、障子
ひきて入ぬ。翁常人にむかひて、叔父君のかうのたまふも
道理なり。此後心をあらため、勘當ゆりんやうに
ふるまひたまへ。かくいひきかせ、常人ハべしにあてかけり
ける。暫ありて頭をあげて人々のおぼさん面目もなく
覚えたれバ、かゝる事ども仕つれど、叔父君の御いかり人
しれず恥をおもひて、誠に夢のさめたるやうにおぼえて、いかで
此後ハひとへにまことのみちをたてて一向に心をあげたし。

行ひをあらためんず。といふ。さてハ本心にかへりたまへるやらん。うれしき事なりなど。翁もよろこびて。そゞろに涙ぐむ。安世が妻袋につゝみたるこがねを持出て。常人が前にさしおきて。今よりそもて世のいとなみすべき料となしたまへ。むかしの薗生もひそかにゆくゑしれずなりて。ねぶりの中にまよひられて有るべし。此身こがねをもてかれをつくのひ出しなばはじめ来りなバ。安世どのゝ悦びハいかばかりならむ。もし此事ニ付てまし。また今ひとつ事もあれど。さてハ此身の勘當もゆるさればやむべき事あるかからずやあり。ねがはくハ天より。我がせがれ一家うちそろひて。ふたゝびめでたく本の近江に帰りすむべし。たゞしたゞへ穴をうがちて入置しとも。ぬすみ人もなきとりおくべき理

なれど。ことにかくまで此身の行ひよろしくて。ゆくすゑもやすからぬべし。といへど。翁もかくこそ思ひなやみし。薗生の夫の此ところへ尋ねはせたまひて。おそれさバ翁とりもちて。此勘當ハゆるさせありけんやうにもてなすべしといへば。常人うなづきて。とにもかくにも叔父君のはからひにまかせたまへ。つくろひなるべし。薗生どのゝ事ハ命にかけてとりかへし参らすべしとて。こがねを持てふところにおさめ入明をまちしかバ。人もなき身ゆゑいと夜をかけりせんと。立あがりて出て行けり。道すがらおもひけるハ。此こがね百両ありもあるべし。いそぎ薗生を尋ねいだし。こがねにかへて我妻とせしのち。乃大がねをもて。いづくの方へもうつりやなど。又も横ざまなる心をおこして。ひとりゑみてあゆみける。凡道のほど。二里ばかり



悪人金剛
二郎と共に
忍入て
とらへられ
安世は遁
て命をかす
けしき逃
帰る所

近江縣物語巻三

きこりねしれりふに茂りたる森林の中にて常人こととふ聲ハ入てきこえしれバ金剛二郎ハかのかごをかたはらに置てうちやをみてをりしがひとへに無事をよろこびて扨いそぎ此皮籠のふたひ取りちて木のひしといへど汝をとりて責さいなむ間皮籠を庭のかたへおりしをとまぎれ入てぬすみつるかぞりけるまハざれしだよきぬひとへといひとしといへば身の毛さへうちておそろしけるされ皮籠のふたひらきて見るにいろ〳〵しき鎧一領ありにさまぐの財ども多く入れてあり常人ハこれハこの鎧ハ我叔父の先祖よりつたへたる物にてことに大事にせる物なりしがきたなくも取えたりといひてそれより皮籠をせおひ人に負させそこを出て四五町あゆみ行けるに金剛ハ

かへりて常人をつく〴〵と見ておのれがふところのおもげに見ゆるぞこがねもちてきたるやといふいかでさやうの物もちてゆゑんがうしおそ命ひとつひろひて帰りし物ぞといへど金剛ますると大きにわらひておのれ金剛ほどのものをたばかりいつはらんとするや人のふところの物のありなしをはかりしらでぬすびとの業いできせんやとくだして見せよといふにちからなくふところをさぐりてこがねつゝみたる袋とり出しはじめをはりを語りきかせけれど耳にもいれでこぶしあげて常人がちやうをつゞけうちておのれがまゝにかくさうとする事こそにくけれ此こがねはおのれはやらぬぞとておのがふところへおしいれさらばとくあゆめとて道を

いそぎてちかより行ける。扨陣につきて常人心にかゝりけれバ、
ねんびごろいふ物ハきこしにまとりておそろしき物てハなけ
きてつかうきぞめ見せて。たゞいまハおのれひとりきてとりつかへる
所ハ長ねせんハむやくし。神崎にハ、数のさうらへども埋め置
かりし、叔母なる人かうくれきかりしこに行て、堀ありての所
りなく我物にせんや。但ふと皮籠に入て奪ひきうし叔父人
の鎧ハなかくし乃物にハあらじ。かれねずまて出てゆかんやと
思ひて、ひとくだりてねけるに。金剛ハさらに心つかず、調伏丸
がもとに行て、夜ふくるまで酒のみのて帰りこず。かの丸ひとり
ぞと思ひて小ねんびごろが、眠りをうかゞいさへに、皮籠の
ひらきて、鎧とり出し、包に入て脊に負ひて跡をも見

ずしてちかより行ける。凡三里ばかりきたりけるが、息きれて術
なけれバ、しバしいこはんとて、そこらを見まハせバ、麦などつく
置ける所あり。穀倉なり。戸ざしもなけれバ、引明て、おくの方に
入て、ねむらんとおもひてありし。子の刻ばかりにやと思ふ頃、おもて
に人のおとしけれバ、それを追きたるにやと、かくれ陰の
ちかくにそひて覗き見けるに、さハなくて男女手ひき
あひて入来り。これハこのあたりにすめる山賊の子の、親など
のめを忍びて、ひそかにかよふにやとて、つれだちて来る
よりくちの方ハ星あかりにて、いさゝかあきらかなり。常人
めをつけて見けれバ、我よりハおとりたるさまなりき。男のそばにハ
衣きて在り。女もむくつけくびくめかる顔にて、何かあ

らんぐつに盛る物を生にうちちらひて。女あいぞれしたる薦
きそげぬしハ我を思ふじやといへぞ男ねか冥加鎮守の
神をうけてかへりハせじ。松山に波うちてぼう貝の天上
すなとてもわぬしをおきて外心つかんや。これを見てげぬ
しのてづから織ておこしつる布をバふんどしとなして男をたぢ
まるさびしかきてをりかどいふ常人をとしけを念じて聞ね
けるが。これも物のほしかりしれバやぞうえひかりてかれが
めち耳のくつのひもをおよびて。ひきよせて見れバいもが
しかをゆでくりそきてるなかりなり。男も女もかくさるに物いひ
かハして口びるをもうごかしきれバ。これをしるしび常人がいと
くらふれとの。高く呼てれバ男心づきてびまのは。鼠

なのありといふ。常人はずなきをきてみすれバさハ鼠なり。
まそきてる物かれにとてとらんとて手をやりてはぐりえる
になりけれバいもがしらハいうにまつるぞさてハわぬし
をやらうひつとしけまでそといふ。女いうぞ籠に入て数
二十ゆでくりてきつるなりおのれらで七爪食りといふ。男
はれハ三つぞうひされ。さてハ十ぞなり。鼠のりていはれるあらし。
くつをさへりていはするハあまくの鼠にハありじといふ。
はて二人ともに帯を解しおるそぶらに狐の時はまくそ
みや。おやしき匂ひのとてさちはてりて顔にふきつく
るやうなれバ常人もまらずおかくさしいへど。女も男も
おどろきて。おゆるしあへつくといひつつ脱る衣をとりて。

逃出るもののごとくひさふれば。おや兄弟とさへ。後の
ちくにくだりくらしまうて足をそこなはしてぞありけり
出行ける老人ありもつゞ。寿をもちあげ。げるひてさて鎧
きぬつけて神崎をさしてぞいそぎけるが。しこま至りて
見るまさいもひ。まへ数ハおとのまゝにく。立てあり。今あては。堀
うがちてかくれたる。安東のごとく。財どもあまさくはありて。それより
くづれたる所などを修理し。つくろひて。おのれ家あるじと
成てすみひそりけるにても。伊賀の國なる。安世が帰りなば
むづかしかりぬべければ。いちはやく安世をころしをそいやと
おもひて。ひそかにそのをかくらひて。伊賀の國へつかはしける
に。安世ハ妻をのこしていづちへか出行けると聞ゆ。

帰り来てそのよしを告ければ。常人ありけるハ。今かく
盗賊どもをひとりさる世に。安世いつも武術に錬じられ
だしてかけよやすく。通りゆきあんや。さてかくて盗人に
あらされぬべし。これハ我さきよりきしきさいそひたるひと
てひとりよろこびて我ぐみしめをりまいれ。

近江縣物語巻之三終

[illegible]

神田通新石町

通新石町